

令和 7 年 5 月 2 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2022～2024

課題番号：22K00546

研究課題名（和文）共同注意場面におけるやりとりと指示詞体系に関する対照言語学的研究

研究課題名（英文）Contrastive Analysis of Interaction and Demonstrative Systems in Joint Attention Situations

研究代表者

平田 未季（Hirata, Miki）

北海道大学・高等教育推進機構・准教授

研究者番号：50734919

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日・中・英・ブラジル葡語の自然会話から共同注意場面を抽出・分析し、指示詞が言語普遍的に持つ複数の代替形と統語範疇が共同注意確立にどう寄与するのか考察した。4言語とも、話者は、相手が指示対象に向ける注意状態を推定し、対象について与える直示情報量の調整のため、指示詞体系内の形式を切り替えていた。さらに、共同注意確立後の対象を談話に持ち込む際、指示詞を用いるか照応詞を用いるかにより、共同注意確立中の指示詞選択の傾向は異なった。なお、人-犬間の共同注意場面でも指示詞切替は生じるが、質的素性や統語素性の切替は生じない、照応詞は用いられない等、人-人間の共同注意場面との重要な違いも観察された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、自然会話データを用い「なぜ指示詞は言語普遍的に複数の代替形と統語範疇を持つのか」という問いについて考察した。分析において用いた、周囲の事物に互いの視覚的共同注意の焦点を誘導する場面（共同注意場面）は、人のコミュニケーションの始原的な場面だと考えられる。本研究では、4言語の会話データをもとに、このような始原的な場面で人が互いの注意の焦点を効率的に調整するために、指示詞の体系性が必要とされていることを明らかにした。さらに、人が主導する犬との共同注意場面をも分析することで、人の言語を解さない犬に対する注意調整場面では、指示詞は用いられるものの、上述の体系性の一部が不要であることも示した。

研究成果の概要（英文）：I analyzed joint attention situations from natural Japanese, Chinese, English, and Brazilian Portuguese conversations, to examine the way that the multiple alternative forms and syntactic categories universally attributable to demonstratives contribute to the establishment of joint attention. In all languages, speakers estimated the addressee's attention level toward the referent and switched among forms among demonstratives to adjust the amount of deictic information provided about the referent. Furthermore, speakers of different languages showed different tendencies in choosing forms while establishing joint attention based on whether their language employs demonstratives or anaphora following the establishment of joint attention. Also, while switching of forms also occurred in human-dog joint attention situations, important differences with human-human interactions were observed, including the lack of switching of qualitative and syntactic features, and the absence of anaphora.

研究分野：認知言語学

キーワード：指示詞 共同注意 視覚的注意 中国語 ブラジルポルトガル語 犬 相互行為

1. 研究開始当初の背景

近年、指示詞が持つ「周囲の環境内の事物に共同注意の焦点を当てる」(Levinson 2018)機能が注目され、使用場面に基づく分析が活発に行われている。しかし、その多くは、指示詞が含まれる単独の発話のみを分析対象としている。一方、自然会話を分析対象とする研究領域では、会話参加者が指さし等のジェスチャーや会話場面に存在する物理的なリソースを利用し、特定の対象に互いの注意を誘導する場面が数多く分析されている。しかし、このような自然会話場面の分析と、言語学の範疇にある指示詞研究は、有機的な連携が形成されていない。

指示詞研究では、他の言語表現にはない指示詞の特徴として、それが言語普遍的に以下の3つの素性により構成される体系性を持つことが指摘されている (Diessel 1999 等)。

- (1) 直示素性 (deictic feature) : 発話空間から指示対象を特定することに寄与する情報。体系内で生産性を持つ語根となることが多い (直示語根 *deictic root*; 日本語の場合、*コ*-, *ソ*-, *ア*-)。
- (2) 質的素性 (qualitative feature) : 事物・位置・人, 有生性もしくは性・数など指示対象を類別する情報。直示語根に派生接辞が付く、もしくは語が屈折するなどして表される (日本語の場合、*-レ*-, *-コ*-, *-ッチ*-, *-イツ*-, *-ラ*など)。
- (3) 統語素性 (syntactic feature) : その形式が現れる統語的な位置情報。直示語根に派生接辞が付くことなどで表される (日本語の場合、*-ノ*-, *-ウ*-, *-ンナ*など。ただし、(2) の*-レ*-, *-コ*-, *-ッチ*も「代名詞」という統語素性を示す)。

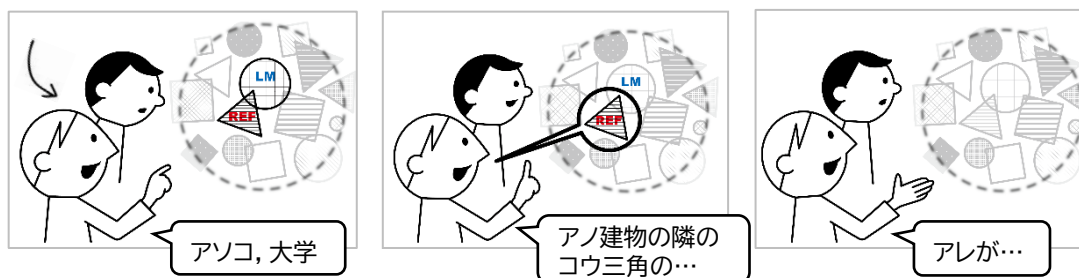
筆者は、これまで、自然会話データを用い、会話参加者が眼前の対象への互いの視覚的注意の焦点を誘導し、さらに共同注意が確立された対象を後続の談話に持ち込むまでを含む一連のやりとり (以下、共同注意場面) における指示詞の用いられ方を分析してきた。具体的には、Butterworth (1995) を参考に共同注意場面で行われるやりとりを以下の3つのプロセスに分け、それぞれのプロセスで選択される指示詞の傾向を明らかにした (平田 2020)。

(4) 共同注意場面における3つの指示プロセス

a. 注意の転換
(attention-switching)

b. 注意の調整
(attention-coordinating)

c. 共同注意の確立後
(after establishing joint attention)



「注意の転換」の段階では、話し手は、指示によって、相手の頭・顔・目の向きを動かし、相手の視線を指示対象が存在する空間に向けさせようとする。この指示では、手さしや腕を伸ばした指さしなどの大きなジェスチャーとともに、位置や方向を示す空間指示代名詞 (*-ッチ*-, *-コ*) が選択される傾向があった。

相手の視野内に候補となりうる対象が複数含まれると話し手が判断した場面で行われる「注意の調整」の段階では、話し手は、意図する指示対象を相手に検出させるため、ランドマークとなる対象および指示対象自体について、言語的な描写や図像的ジェスチャー (*iconic gesture*) といった非直示的な情報や、「注意の転換」段階よりも精密に対象の位置を指し示す指さしによる情報等を提供する。これらの情報には指示詞が付加されるが、その際、言語情報には名詞句と統語的に共起可能な決定詞 (*-ノ*) が、図像的ジェスチャーには様態を表す副詞 (*-ウ*) が付加される傾向があった。

相手の反応・発話から、相手の視覚的注意が意図する対象に向けられていると判断可能となり、その共同注意が確立した対象を後続の談話に持ち込む「共同注意の確立後」の段階では、多くの場合、指さしは停止される。加えて、これまでの活動との切り替わりを示すため、指示詞は切り替えられる。この時、最も情報量が少ない指示代名詞 (*-レ*) が選択されることが多かった。

以上のように、共同注意場面で、話し手は、発話毎に変化する聞き手の注意を効率的に調整するために、*コ*-, *ソ*-, *ア*-のような直示素性のみならず、直示素性と質的素性 (*-レ*-, *-コ*-, *-ッチ*)・統語素性 (*-ノ*-, *-ウ*) の組み合わせにより形成される複数の形式を利用し、相手に与える直示情報と非直示情報を調整しながら、効率的に共同注意を確立させようとしていた。この「指示詞の切り替え」は、意図する対象に向けて相手の注意を効率的に誘導するだけでなく、やりとりが今どの局面にあるかを互いに明示する役割を果たしている。すなわち、指示詞がこのような複数の代替形を持つことは、物理的な文脈を参照させる外部照応 (*exophoric use*) と言語内的な指示である内部照応 (*anaphoric use*) とを含む複雑なやりとりの構造化に大きく寄与している。

2. 研究の目的

以上の結論は日本語指示詞の分析のみから導かれたものである。一方、上述の通り、指示詞は、

言語普遍的に直示素性、質的素性、統語素性から成る体系性を有している。本研究では、日本語と語族・構造が異なる言語においても、指示詞が持つ質的素性・統語素性が「周囲の環境内の事物に共同注意の焦点を当てる」ことに寄与しているかを検証する。具体的には、日本語に加え、中国語・ブラジルポルトガル語（以下、伯葡語）・英語を分析対象とし、それぞれの共同注意場面におけるやりとりの中で指示詞の体系性がどのように利用されているのかを日本語と比較しながら分析する。

3. 研究の方法

平田（2020）では、屋外及び屋内展望室での日本語母語話者の自然会話から共同注意場面を抽出し、それを（4）の3つのプロセスに分け、それぞれのプロセスで選択される指示詞の傾向を分析した。本研究では、平田（2020）が用いたデータのうち、展望室での自然会話のみを分析対象とし、全く同じ条件で、成人の中国語、ブラジルポルトガル語、英語母語話者2名の会話を収集した。データの収集法は以下の通りである。

(5) 展望室データ

対象：友人関係にある成人中国語母語話者2名、伯葡語母語話者2名、英語母語話者2名
 場面：地上38階での展望室での会話場面
 方法：「展望室の中を歩いて、窓の外の景色・建物について話してください。もちろんほかのことを話しても構いません」という指示を与え、50分自由に行動してもらった。会話終了後の10分間は展望台に設置された望遠鏡を用いて、互いが意図する対象を当てあうゲームをしてもらった。

以上の方法で収集した60分×4言語（計240分）のデータから、共同注意場面を抽出し、研究協力者とともにそれらの場面を（4）の3つのプロセスに分け、それぞれのプロセスで選択される指示詞の傾向を分析した。

さらに、比較のため、人の言語を解さない人-犬間のやりとりのデータも以下の通り収集した。

(6) 人-犬のやりとりデータ

対象：犬とその飼主4組の生活場面
 場面：データ収集者が犬と飼主の散歩に同行し撮影した散歩場面と、飼主の自宅内にGoProを設置し飼主に随時録画をしてもらった室内でのやりとり場面
 方法：できる限り通常通りふるまうよう依頼。自宅内でのデータ収集については、録画しても構わないタイミングで録画ボタンを押してもらった。

以上の方法で収集した約240分のデータから、共同注意場面を抽出し、そこで人が犬に対して用いる指示詞の傾向を分析した。

4. 研究成果

4言語の展望室データから、表1の通り、計198件の指示詞を用いた指示を抽出した。

表1 3言語の共同注意場面における指示件数

	a. 注意の転換	b. 注意の調整	c. 共同注意の確立	計
日本語	19件	31件	14件	64件
中国語	8件	18件	5件	31件
伯葡語	13件	34件	14件	61件
英語	10件	17件	3件	30件

表2の各指示において選択された指示詞の内訳を言語別に表2-5にまとめた。指示詞は、指示対象に対する情報提供性が低いものから高いものの順に番号を振っている。いずれの言語でも「1」の指示代名詞は、対象に関する情報提供性が最も低いと考える。位置や方向を示す指示詞は、空間情報を含む「1」の指示代名詞よりも、対象についての情報提供性が高い。日・中語・英語では、これに、非直示情報に指示詞を付加する、指示決定詞+普通名詞、もしくは様態を表す指示副詞+図像的ジェスチャーの組み合わせが続くが（表2,3,5「3」）、伯葡語では、指示代名詞と空間情報を示す指示副詞の共起が可能であるためこちらを「3」とし、指示決定詞と普通名詞の共起を「4」とした。さらに、伯葡語では、指示決定詞と普通名詞に、空間情報を示す指示副詞を後接するという非常に情報提供性の高い組み合わせが可能である（表4「5」）。各段階において選択されやすい傾向を持つ形式を黄色でマークする。

表2 日本語指示詞の分布

	統語範疇・質的素性	例	転換	調整	確立後
1	PRO	コレ	4	7	8
2	PRO (direction)	コッチ	7	0	1
	PRO (location)	ココ	7	2	1
3	DET+N	コノ建物	1	12	1
	ADV+ iconic gesture	(対象の形をなぞり)コウ	0	3	1
4	PRO+ノ+N	ココノ建物	0	7	2

表 3 中国語指示詞の分布

	統語範疇・質的素性	例	転換	調整	確立後
1	PRO	这/这个	5	2	1
2	PRO (direction)	这里	2	4	1
	PRO (location)	这边	1	0	1
3	DET + N	这个 建筑物	0	12	2
	ADV + iconic gesture	(対象の形をなぞり)这样	0	0	0

表 4 伯葡語指示詞の分布

	統語範疇・質的素性	例	転換	調整	確立後
1	PRO	esse	0	4	3
2	ADV (direction)	cá	3	4	4
	ADV (location)	aqui	5	4	3
3	PRO + ADV	esse aqui	3	4	3
4	DET + N	esse prédio	1	10	0
5	DET + N + ADV	esse prédio aqui	1	8	1

表 5 英語指示詞の分布

	統語範疇・質的素性	例	転換	調整	確立後
1	PRO	this	2	1	1
2	DET + PRO	this one	0	6	1
3	ADV (location /direction)	here	8	0	0
4	DET + N	this building	0	10	1

「注意の転換」、「注意の調整」の2段階では、いずれの言語においても同じ傾向が見られた。まず、「注意の転換」の段階では、空間情報を持つ形式が選択される傾向があった。表3の中国語では空間指示代名詞よりも空間情報を持たない指示代名詞が多く選択されているが、他の3言語では、すべての指示において、話し手・聞き手から離れた窓外の対象が指されていたのに対し、中国語の指示代名詞による指示5例中3例は、話し手が手に持っている対象の指示であった。この指示対象特定にかかる難易度が、指示対象を含む空間を指すか、指示対象そのものを直接指すかの違いに関係している可能性がある。なお、指示詞を含む発話の構造、指示詞が現れる統語的位置にも顕著な共通性が見られた。中・英語では、「注意転換」場面の指示の8割近くが、指示詞を含む名詞句のみ、もしくは単純な同定文によってなされていた。日・伯葡語も、中・英語ほど顕著ではないものの、単純で短い発話構造の使用が半数を超えた。また、どの言語においても、選択される指示詞の統語範疇にかかわらず、指示詞は発話頭という目立つ位置に置かれることが明らかに多かった。

次に、「注意の調整」の段階では、どの言語においても、指示決定詞と言語情報を組み合わせる情報提供性の高い形式が多く選択された。特に伯葡語では、「指示決定詞+名詞+指示副詞」という直示情報が重複する形式の使用が目立った。指示詞を含む発話の構造については、「注意の転換」段階の指示と比べると、どの言語においても、単純で短い発話の使用が減り、指示詞が発話頭に置かれる割合も大幅に減った。

最後に、「共同注意の確立後」の段階では、日・伯葡語と、中・英語の間に顕著な違いが見られた。まず、日・伯葡語では、指さしの停止とともに、「注意の調整」段階の指示と比べると、相対的に情報提供性の低い形式が選択された。一方、中国語・英語の指示詞選択には顕著な傾向がなかったが、実はこのような場面の多くで、指示詞ではなく、指示詞体系の外にある前方照応詞「它」もしくは‘it’が選択されていた。これらは先行する談話内の言語的要素を指す形式であり、指示対象に関する直示情報は示さない。「它」や‘it’の使用を考慮に入れば、中・英語も、日語・伯葡語と同様に、「共同注意の確立後」には、指示対象に対する情報提供性を低めていると言える。

以上をまとめると、いずれの言語においても、「注意の転換」指示では空間情報を示す指示詞が、「注意の調整」指示では情報提供性の高い指示詞が選択される傾向があった。指示詞を含む発話構造をみると、「注意の転換」指示では、非常に単純で短い発話が多用され、たとえその要素が主部でなくても倒置や省略などの操作によって、指示代名詞も指示副詞も発話頭という目立つ位置に置かれることが多かった。この指示は言語習得期の幼児が行う指示と類似しており、指示のプリミティブな形だと考えることができる。これに対し、「注意の調整」指示では、指示詞についての言語的情報が提供されるため、発話構造が複雑化する。指示詞も発話の中に統語的に組み込まれ、「注意の転換」場面のような統語的柔軟性が失われる。「共同注意の確立後」には、さらに文が複雑化するが、それに反比例するように、指示詞の情報提供性は低められる。以上のように、指示詞体系が含む質的素性・統語的素性は、語族・構造が異なる4言語において共通して、直示素性と同様に「周囲の環境内の事物に共同注意の焦点を当てる」という指示詞の最も重要な機能を果たすことに寄与している。指示詞は、直示素性のみならず、質的素性・統語的素性を示す複数の形式を含む体系を形成することで、「上」「右」などの空間直示表現や「ほら」など

の注意喚起表現とは異なり、指示詞は相手の注意状態を考慮しながら、対象についての情報提供の内容や量を調整することを可能にしていると言える。

では、このように体系性を有する指示詞は、人の言語を解さない相手、例えば犬に対する指示ではどのように用いられているのであろうか。本研究が収集した人-犬のやりとりデータから、人が犬に対し複数の指示詞を用いて犬の注意を対象に向けさせようとする‘共同注意場面’を5件抽出した。そのうち2例を以下に示す。

事例1 [2406_kar_00:11-00:30]

- 01 飼主: *はいは+#いこも(.))*+ (1.0) *今度こ-+#ここ (0.5) *ここここ *+ (0.5)
 飼主 *床を指で何度か叩く---* *指さす-----*指で床を叩く*
 犬 +顔を向ける---+指されたものを食べる---+顔を上げ指の方を見る-----+床をなめる->
 #Fig.1 #Fig.2
- 02 飼主: *ここ *ここ# * (0.6) *ここ! *ほれ, *+こ::こだ!
 飼主 *指さしの手を犬の頭の上へ*手で頭を押す*頭をなでる*指さし*指を顔の前へ*手で顔を押し
 犬 -----+押され顔を上げる->
 #Fig.3
- 03 飼主: *こ:こ!ほら,*+ *(.) え。 ほれ!+ *ほい!+ *よし.
 飼主 *指さし-----*指で床を叩く*食べ残しを集める-----*手を引く*体を起こす
 犬 -----+顔をそむける#-----+顔を向ける--+食べ始める----->>
 #Fig.4



事例2 [2202_tem_21:09-21:21]

- 01 飼主: +°おいで°
 飼主 *雪玉を犬の方に差し出す----->
 犬 +雪玉を見ず飼主の前を通り過ぎる->
 02 飼主: こ-これ, こ+#れ, これ覚え +て.
 飼主 ----->
 犬 -----+立ち止まり顔を向ける+飼主に近づき止まる->
 #Fig.5
- 03 飼主: これ.覚*#えた
 飼主 *犬の口に軽く雪玉をぶつける--*指で犬の顎に触れる*雪玉を前方に投げる
 犬 -----+雪玉の方に走り探す
 #Fig.6
- 04 飼主: +(0.2) °はい,はいはいはい°.それでした#か.ほん+*¥と:にそ[れ]でしたか.¥
 飼主 *右腕を下に下げる
 犬 +雪を啜え駆け戻ってくる-----+雪を下に落とし地面のにおいをかぐ
 #Fig.7



事例1,2が示すように、人の犬に対する‘共同注意場面’では、指示が「注意の転換」の段階から「注意の調整」に進むことがほぼなかった。人-人間の指示では、話し手が指示詞を含む指示を行い、相手が顔や視線の向きを変えれば、話し手は「注意の調整」もしくは「共同注意の確立後」の段階に進むが、人-犬間のやりとりでは、犬が頭や視線の向きを変えた（ように見えた）としても、人の指示は「注意の転換」段階にとどまり、犬が、人が意図する行動（事例1では残した餌を食べること、事例2では雪玉に接触すること）をとって初めて「注意の転換」指示は終了した。指示の段階が進まないことと関連し、指示詞の切り替えも生じにくい。ただし、事例2が示すように、犬が相手であっても直示素性の切り替えは生じることに注意すべきである。一方で、事例1は「-こ」、事例2は「-れ」が何度も繰り返し用いられるように、質的素性・統語素性が切り替えられることはほぼない。さらに、指示の発話構造も、人-人間の「注意の転換」段階と同様に、一語文もしくは単純で短い同定文の使用が9割を超えた。また、人-人間の指示ではあまり見られなかった「ほら」「ほれ」等の注意喚起語の使用も多かった。

以上の人の犬に対する指示は、先述の人-人間の「注意の転換」段階の指示と同様に、非常にプリミティブな指示の形だと考えることができる。一方で、このようなプリミティブな指示であっても、直示素性の切り替えは生じることは注目に値する。共同注意場面における対象に関する直示情報は、ある程度話し手の主観的な認知によって決定可能な側面があるのに対し、質的情報や統語範疇の選択は、聞き手の注意状態の推移により依存している可能性がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 平田未季	4. 巻 41(3)
2. 論文標題 指示のしくみと指示詞の意味	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 76-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 平田未季
2. 発表標題 人の犬に対する指示の展開 内的状態の推定と指示表現の選択に注目して
3. 学会等名 第49回社会言語科学会研究大会
4. 発表年 2025年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------